

## 注意事項

1. 試験問題の数は60問で解答時間は正味2時間30分である。
2. 試験問題の持帰りを認めない。
3. 解答方法は次のとおりである。

(1) 各問題にはaからeまでの五つの答えがあるので、そのうち質問に適した答えを一つ選び、次の例にならって答案用紙に記入すること。

(例) 101 県庁所在地はどれか。

- a 栃木市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

正解は「c」であるから答案用紙の

101  a  b  c  d  e のうち  c をマークして

101  a  b  c  d  e とすればよい。

(2) 答案の作成にはHBの鉛筆を使用し、濃くマークすること。

良い解答の例……  (濃くマークすること。)

悪い解答の例……   (解答したことにならない。)

(3) 答えを修正した場合は、必ず「消しゴム」であとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色が残ったり「」のような消し方などをした場合は、修正したことにならないので注意すること。

(4) 1問に二つ以上解答した場合は誤りとする。

(5) 答案用紙は折り曲げたりメモやチェック等で汚したりしないよう特に注意すること。

1 32歳の初産婦。妊娠32週。昨夜から悪寒、嘔吐および背部痛が出現したので来院した。身長156cm、体重58kg。体温38.2℃。脈拍96/分、整。血圧120/82mmHg。軽い子宮収縮はあるが圧痛はない。尿所見：蛋白2+、沈渣に赤血球2~5/1視野、白血球多数/1視野。血液所見：赤血球380万、Hb11.2g/dl、Ht35%、白血球12,000。

最も考えられるのはどれか。

- a 上気道炎
- b 尿管結石
- c 腎盂腎炎
- d 絨毛膜羊膜炎
- e 胆嚢炎

2 30歳の初産婦。妊娠38週4日。陣痛が発来したので入院した。妊娠中の経過は順調であり、入院後も陣痛は次第に増強して子宮口も徐々に開大した。8時間後、子宮口9cm開大、児頭の下降度SP+2cm、児頭の小泉門は9時の方向に位置したままで分娩進行は遷延している。胎児心拍数陣痛図(別冊No. 1)を別に示す。

この時点で考えられるのはどれか。

- a 続発性微弱陣痛
- b 軟産道強靱
- c 児頭骨盤不均衡
- d 後方後頭位
- e 低在横定位

別冊 No. 1 図
---------------

3 日齢7の新生児。右頭頂部の半球状腫瘍を主訴に受診した。正期産、吸引分娩で出生した。出生体重3,140g。腫瘍は生後間もなく出現し、24時間を過ぎたころから更に大きくなった。腫瘍には波動を認める。

正しいのはどれか。

- a 腫瘍は骨縫合を越える。
- b 高ビリルビン血症を伴う。
- c 左上下肢の麻痺を伴う。
- d 穿刺吸引が必要である。
- e 後遺症として脳障害がある。

4 42歳の男性。競馬騎手。20年来の大酒家である。3日前、落馬による下腿骨骨折で緊急手術を受けた。術後、不眠を訴えていたが、本日になって深夜急に起き上がろうとして点滴を自己抜去しようとする。看護師が制止すると、「助けてくれ。」と叫び振り払おうとする。発汗著明であり、自分の状態がわかっていないようで、視線も定まっていない。

適切な対応はどれか。

- a 警察への通報
- b 頭部単純CT
- c 電気けいれん療法
- d 塩酸モルヒネの投与
- e ジアゼパムの投与

5 23歳の女性。熟睡できないことを主訴に来院した。2か月前に運転していた自動車が対向車と正面衝突し、同乗していた友人が死亡した。その際、後頭部を強打したが、精密検査で異常がなく、その後の日常生活にも支障はなかった。1か月半前から夢の中に事故の瞬間の情景が毎日のように再現され、強い恐怖感で覚醒するようになった。最近、苦しくて気分が落ちこみ、ささいな物音にもびくつき、怒りっぽく、引きこもりがちな生活を送っている。

考えられるのはどれか。

- a 解離性障害
- b パニック障害
- c 全般性不安障害
- d 恐怖症性不安障害
- e 外傷後ストレス障害

6 3歳の男児。階段から転落して受傷したとのことで、母親に連れられて来院した。左上腕の疼痛を訴え、腫脹を認める。体表の数か所にやけどの瘢痕や皮下出血がみられる。

初期診療後、医師の対応として適切なのはどれか。

- a 親戚に連絡する。
- b 児童相談所に速やかに連絡する。
- c 最寄りの警察に直ちに届け出る。
- d 母親に児童相談所の連絡先を教える。
- e 母子ともに帰宅させる。

7 20歳の男性。出生時から存在する顔面の皮疹を主訴に来院した。幼児期からけいれん発作がある。最近、左眼の眼圧亢進も指摘されている。顔面の写真(別冊No. 2)を別に示す。

診断はどれか。

- a Peutz-Jeghers 症候群
- b von Recklinghausen 病
- c Sturge-Weber 症候群
- d von Hippel-Lindau 病
- e Vogt-小柳-原田病

別冊  
No. 2 写真

8 75歳の男性。癢疹を伴う皮疹を主訴に来院した。介護老人保健施設入所後から、指間、外陰部に強い癢疹を伴う発疹が出現した。指間部の写真(別冊No. 3A)と角質の苛性カリ標本像(別冊No. 3B)とを別に示す。

適切な治療薬はどれか。

- a 抗真菌外用薬
- b 抗ウイルス外用薬
- c ビタミンD<sub>3</sub>外用薬
- d イオウ含有外用薬
- e 副腎皮質ステロイド外用薬

別冊  
No. 3 写真A、B

9 53歳の女性。人間ドックの眼底検査で異常を指摘され来院した。視力は右1.0(矯正不能)、左1.0(矯正不能)。左眼底写真(別冊No. 4A)と視野図(別冊No. 4B)とを別に示す。右眼底も同様の所見である。

考えられるのはどれか。

- a 緑内障
- b ぶどう膜炎
- c 視神経炎
- d 虚血性視神経症
- e 頭蓋内占拠性病変

別冊  
No. 4 写真A、図B

10 18歳の女子。暗いところで見えにくいと訴えて来院した。視力は右0.1(1.2×-4.00D)、左0.1(1.2×-4.00D)。左眼の眼底写真(別冊No. 5)を別に示す。右眼底も同様の所見である。

この患者で最も考えられる視野異常はどれか。

- a 中心暗点
- b 盲点中心暗点
- c 弓状暗点
- d 輪状暗点
- e らせん状視野

別冊  
No. 5 写真

11 27歳の男性。口唇部の痛みを主訴に来院した。数年前から口腔内に痛みを伴う小さな病変ができ、5、6日で自然に治癒する。このようなことが年に数回ある。体の他の部位に異常はない。体温36.2℃。血液所見：赤血球402万、Hb 11.0 g/dl、白血球4,600。CRP 0.1 mg/dl (基準0.3以下)。口唇部の写真(別冊No. 6)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a アフタ性口内炎
- b 鰐口瘡
- c 白斑(板)症
- d 天疱瘡
- e 口唇癌

別冊  
No. 6 写真

12 54歳の男性。がん検診で胸部エックス線写真の異常を指摘され精査のため来院した。自覚症状はない。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.42、PaO<sub>2</sub> 80 Torr、PaCO<sub>2</sub> 40 Torrであった。胸部エックス線写真(別冊No. 7)を別に示す。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察
- b 気管支拡張薬投与
- c 抗菌薬投与
- d 副腎皮質ステロイド薬投与
- e 胸腔ドレナージ施行

別冊  
No. 7 写真

13 18歳の女子。運動時の息切れと動悸とを主訴に来院した。3か月前から同症状を自覚している。呼吸数14/分。脈拍88/分、整。血圧120/72 mmHg。右背部に連続性血管性雑音を聴取し、深吸気で増強する。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.41、PaO<sub>2</sub> 72.6 Torr、PaCO<sub>2</sub> 33.6 Torr。胸部エックス線写真(別冊No. 8A、B)を別に示す。

この患者で今後起こり得るのはどれか。

- (1) 喀血
- (2) 肺炎
- (3) 肺水腫
- (4) 脳膿瘍
- (5) チアノーゼ

- a (1)、(2)、(3)
- b (1)、(2)、(5)
- c (1)、(4)、(5)
- d (2)、(3)、(4)
- e (3)、(4)、(5)

別冊  
No. 8 写真A、B

14 46歳の男性。肺癌の診断で肺葉切除術を受けるため入院した。5年前に気管支喘息と診断され、以後発作時に吸入薬を頓用していた。最近の発作は3か月前であった。呼吸数14/分。脈拍76/分、整。血圧116/82 mmHg。胸部にwheezes(笛様音)を聴取しない。血液所見に異常はなく、心電図は正常範囲である。スパイロメトリ：VC 3.2 l、%VC 92%、FEV<sub>1.0</sub> 2.2 l、FEV<sub>1.0</sub>% 68%。

麻酔管理で適切なのはどれか。

- (1) 硬膜外麻酔単独で管理する。
- (2) 麻酔導入前に気管切開を行う。
- (3) 人工呼吸は吸気時間：呼気時間比を1：1とする。
- (4) 揮発性麻酔薬を使用する。
- (5) 発作時にはアミノフィリンを投与する。

- a (1)、(2)
- b (1)、(5)
- c (2)、(3)
- d (3)、(4)
- e (4)、(5)

15 62歳の男性。健康診断を受け、胸部エックス線写真で異常陰影を指摘されて来院した。自覚症状はなく、元気に日常活動を行っている。3年前に狭心症のため冠動脈バイパス術を受けた。喫煙は20歳から手術を受けるまで1日30本を続けていた。身体所見に異常は認めない。血液所見：赤沈15 mm/1時間、赤血球480万、白血球7,300。胸部エックス線写真(別冊No. 9A)と喀痰細胞診 Papanicolaou 染色標本(別冊No. 9B)とを別に示す。

この患者で最もきたしやすい合併症はどれか。

- a 気胸
- b 肺梗塞
- c 縦隔気腫
- d 肺線維症
- e 閉塞性肺炎

別冊  
No. 9 写真A、B

16 75歳の女性。突然の呼吸困難のため救急車で搬入された。家族の話では直前までもちを食べていたという。努力呼吸が著明で、吸気時に喉頭部下方牽引(tracheal tug)を認める。チアノーゼが現れ、意識レベルが低下傾向にある。喉頭鏡を用いて直視下に異物摘出を試みたが成功しない。

直ちに行うべきことはどれか。

- a 動脈血ガス分析
- b マスクによる酸素投与
- c マスクによる人工呼吸
- d 経鼻気管内挿管
- e 輪状甲状軟骨間膜切開

17 74歳の男性。労作時の息切れを生じるようになり来院した。20年前に高血圧を指摘されたが治療は受けていない。下肺野に coarse crackles(水泡音)、心尖部に心室性奔馬調律を聴取する。脈拍76/分、整。血圧162/92 mmHg。心電図(別冊No. 10)を別に示す。心臓カテーテル検査で左室拡張末期圧22 mmHg(基準12以下)、心係数3.2 l/分/m<sup>2</sup>(基準2.3~3.6)。心血管造影で左室駆出率56%、冠動脈に狭窄病変はない。

適切な薬物はどれか。

- a 抗菌薬
- b 利尿薬
- c 抗凝固薬
- d 抗不整脈薬
- e 気管支拡張薬

別冊  
No. 10 図

18 24歳の男性。高熱と全身倦怠感を主訴に来院した。1か月前から微熱が続いている。体温39.1℃。脈拍96/分、整。血圧164/48 mmHg。胸骨左縁第3肋間に3/6度の拡張期雑音が聴取される。血液所見：赤血球370万、白血球16,000。CRP 13 mg/dl(基準0.3以下)。胸部エックス線写真で心胸郭比55%、肺野にうっ血を認めない。心電図で軽度の左室肥大を認める。

診断に有用なのはどれか。

- a 心エコー検査
- b 胸部単純CT
- c 心筋シンチグラフィ
- d 心血管造影
- e 心筋生検

19 55歳の男性。最近、駅の階段を昇るときに胸部圧迫感が出現するようになり来院した。20年前から高血圧の治療を受けている。喫煙は1日30本を25年以上続けている。脈拍84/分、整。血圧164/96 mmHg。心電図(別冊No. 11A)と左冠動脈造影写真(別冊No. 11B)とを別に示す。

適切でない対応はどれか。

- a 経過観察
- b ニトログリセリン投与
- c 抗血小板薬投与
- d  $\beta$ 受容体遮断薬投与
- e 経皮的冠動脈形成術

別冊  
No. 11 図A、写真B

20 62歳の女性。一過性意識消失のため来院した。5年前から労作時に胸部圧迫感を感じていた。心尖部にⅢ音とⅣ音とを聴取し、胸骨左縁第4肋間に3/6度の駆出性収縮期雑音を聴取する。心電図(別冊No. 12A)と心エコーの左室Mモード像(別冊No. 12B)とを別に示す。

適切な治療薬はどれか。

- (1) ジギタリス
- (2) 利尿薬
- (3) 亜硝酸薬
- (4)  $\beta$ 受容体遮断薬
- (5) カルシウム拮抗薬

a (1)、(2)    b (1)、(5)    c (2)、(3)    d (3)、(4)    e (4)、(5)

別冊  
No. 12 図A、写真B

21 60歳の女性。交通事故で前胸部を強打し、救急車で搬入された。意識清明で胸背部痛を訴えている。体温36.9℃。呼吸数24/分。脈拍112/分、整。血圧86/64 mmHg。顔面は蒼白で、眼瞼結膜は貧血様である。前胸部に皮下出血があるが腹部には異常はない。血液所見：赤血球350万、Hb 11.0 g/dl、Ht 33%。胸部エックス線写真(別冊No. 13)を別に示す。

まず行うべき検査はどれか。

- a 胸部造影CT
- b 肺動脈造影
- c 気管支動脈造影
- d 気管支鏡
- e 食道内視鏡

別冊  
No. 13 写真

22 73歳の女性。昨夜コップ1杯の吐血があり来院した。1年前から時々胸やけを生じている。2か月前から心房細動のためワーファリンの服用を開始しているが、それ以外の薬剤は服用していない。血液所見：赤血球412万、Hb 13.8 g/dl、Ht 41%、白血球7,800、血小板32万。食道内視鏡写真(別冊No. 14)を別に示す。

吐血の原因として最も考えられるのはどれか。

- a 逆流性食道炎
- b 薬物性食道潰瘍
- c 食道扁平上皮癌
- d 食道静脈瘤
- e Mallory-Weiss 症候群

別冊  
No. 14 写真

23 81歳の女性。昼食後洗面器一杯の吐血があり救急車で搬入された。2か月前から腰痛のため非ステロイド性抗炎症薬を投与されていた。4日前から心窩部痛を訴えていた。意識は清明。脈拍96/分、整。血圧100/60 mmHg。皮膚は蒼白で冷たい。眼瞼結膜は貧血様。心窩部に圧痛を認める。血液所見：赤血球270万、Hb 8.4 g/dl、Ht 23%、白血球12,300。緊急上部消化管内視鏡検査の胃角部写真(別冊No. 15)を別に示す。

適切でない対応はどれか。

- a 非ステロイド性抗炎症薬中止
- b 制酸薬投与
- c 輸液
- d 露出血管のクリッピング
- e 胃全摘

別冊  
No. 15 写真

24 82歳の女性。今朝、腹痛と腹部膨満感が出現し来院した。大腸癌の手術のため自宅待機中であった。意識は清明。体温36.8℃。呼吸数14/分。脈拍96/分、整。血圧142/82 mmHg。腹部は全体に膨隆し広範に軽度の圧痛を認める。腹部超音波写真(別冊No. 16A)と注腸造影写真(別冊No. 16B)とを別に示す。

写真から考えられるのはどれか。

- a 閉塞性腸炎
- b 腸重積症
- c 大腸癌膀胱浸潤
- d 大腸癌卵巣転移
- e 腹腔内膿瘍

別冊  
No. 16 写真A、B

25 28歳の男性。3か月前から腹痛と下痢とを繰り返すため来院した。1か月前に他院を受診し検査を受けたが、血液所見、血清生化学所見および上部消化管造影検査はいずれも異常ないと言われた。

鑑別診断のため確認が重要な症状はどれか。

- (1) 体重減少
- (2) 血便
- (3) 発熱
- (4) 食欲
- (5) 口渇

- a (1)、(2)、(3)
- b (1)、(2)、(5)
- c (1)、(4)、(5)
- d (2)、(3)、(4)
- e (3)、(4)、(5)

26 66歳の男性。人間ドックの便潜血反応が陽性であったため精密検査を勧められ来院した。腹部は平坦、軟で圧痛は認めない。指診で直腸に隆起性病変が疑われた。直腸内視鏡写真(別冊No. 17A)と生検組織H-E染色標本(別冊No. 17B)とを別に示す。

診断はどれか。

- a 腺腫
- b 脂肪腫
- c 平滑筋腫
- d カルチノイド
- e 悪性リンパ腫

別冊  
No. 17 写真A、B



27 65歳の男性。昨日からお金をばらまくなどの奇異な行動がみられるとのことで家族に伴われて来院した。3日前から排便はなく、昨夕から食事はしていない。23歳時の右胸郭形成術の際に輸血を受けた。飲酒歴はない。意識はもうろうとしている。身長157 cm、体重53 kg。体温36.8℃。脈拍84/分、整。血圧118/76 mmHg。顔貌は無気力状。心音、呼吸音に異常はない。腹部はやや膨隆し、心窩部に辺縁鈍で硬い肝を6 cm 触知する。脾濁音界は拡大している。下肢に軽度の浮腫を認める。血液所見：赤血球384万、白血球3,200、血小板5.3万。

この患者の血清生化学所見で基準値よりも低いのはどれか。

- (1) アルブミン
- (2) アンモニア
- (3) 総ビリルビン
- (4)  $\gamma$ -グロブリン
- (5) コリンエステラーゼ

a (1)、(2)    b (1)、(5)    c (2)、(3)    d (3)、(4)    e (4)、(5)

28 58歳の男性。心窩部痛を主訴に来院した。2か月前から断続的に出現していた心窩部痛が、最近毎食後出現するようになった。この2か月で体重が3 kg 減少した。発熱はない。心窩部に圧痛を認めるが、腫瘤は触知しない。血液所見と血清生化学所見とに異常は認めない。腹部超音波写真(別冊No. 18)を別に示す。

予想される疾患で最も感度の高い腫瘍マーカーはどれか。

- a  $\alpha$ -フェトプロテイン(AFP)
- b CEA
- c CA19-9
- d SCC
- e PA (PSA)

別冊  
No. 18 写真

29 42歳の女性。腹部膨満感を主訴に来院した。10か月前に胃全摘術を受けている。皮膚はやや乾燥し蒼白である。腹部は全体に膨隆し、上腹部正中に手術痕を認める。10か月前に摘出された胃の標本の肉眼像(別冊No. 19A)、H-E染色標本(別冊No. 19B)および今回来院時の腹部単純CT写真(別冊No. 19C)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 消化管穿孔
- b 腹腔内膿瘍
- c 腸閉塞(イレウス)
- d 癌性腹膜炎
- e 後腹膜腫瘍

別冊  
No. 19 写真A、B、C

30 78歳の男性。腹部の激痛を主訴に救急車で午後7時に搬入された。2日前に2回嘔吐し食思不振となった。その後下痢があり、本日午後4時ころ突然腹痛が出現した。いったんは寛解したが、30分位で再び痛みを覚え次第に増強、激痛が続いている。意識は清明。身長168 cm、体重62 kg。体温37.3℃。脈拍124/分、整。血圧88/52 mmHg。眼瞼結膜に貧血はなく、眼球結膜に黄疸を認めない。腹部は平坦、軟で、臍周囲に圧痛があるが、筋性防御はない。腸雑音は聴取されず、腸管壊死を疑った。

考えられる検査所見はどれか。

- (1) 血小板減少
- (2) 血清K値低下
- (3) 血清Na値低下
- (4) LDH増加
- (5) 代謝性アシドーシス

a (1)、(2)、(3)    b (1)、(2)、(5)    c (1)、(4)、(5)  
d (2)、(3)、(4)    e (3)、(4)、(5)

31 26歳の男性。自家用車の自損事故で腹部にハンドル外傷を受け、救急車で搬入された。意識は清明。呼吸数18/分。脈拍116/分、整。血圧102/76 mmHg。顔面は蒼白である。眼瞼結膜は貧血様で、眼球結膜に黄疸はない。胸部は視診、打聴診で異常を認めず、心窩部から右季肋部に打撲によると思われる皮下出血を認める。腹部は平坦であるが軽い圧痛を右季肋部に認める。血液所見：Hb 10.5 g/dl、白血球 9,800。

まず行うべき検査はどれか。

- (1) 腹部超音波検査
- (2) 腹部造影 CT
- (3) 静脈性尿路(腎盂)造影
- (4) 腹腔動脈造影
- (5) 上部消化管内視鏡検査

a (1)、(2)    b (1)、(5)    c (2)、(3)    d (3)、(4)    e (4)、(5)

32 46歳の女性。貧血の精査を目的に紹介され来院した。2年前から両側手指・手背、肘および膝の関節痛と腫脹とがあり、関節リウマチと診断され治療を受けている。体格栄養は中等度。体温36.8℃。脈拍76/分、整。血圧124/76 mmHg。眼瞼結膜は貧血様である。リンパ節腫大と肝脾腫とは認めない。血液所見：赤沈78 mm/1時間、Hb 7.8 g/dl、MCV 75  $\mu\text{m}^3$ (基準83~93)、白血球7,800、血小板38万。血漿フィブリノゲン580 mg/dl(基準200~400)。CRP 6.5 mg/dl(基準0.3以下)。

この患者でみられる検査所見はどれか。

- a 網赤血球増加
- b 間接ビリルビン増加
- c 血清鉄増加
- d 血清フェリチン増加
- e 血漿エリスロポエチン低下

33 42歳の男性。発熱と紫斑とを主訴に来院した。生来健康であったが1か月前から疲労感を自覚するようになった。1週前に歯磨き時に出血し、四肢の紫斑に気付いた。昨夜、悪寒とともに発熱した。体温37.8℃。脈拍92/分、整。血圧114/60 mmHg。顔色は蒼白で眼球結膜に黄染はない。歯肉出血があり、咽頭の発赤を認める。肝・脾は触知しない。前胸部と四肢に斑状出血と多数の点状出血とを認める。神経学的所見に異常を認めない。血液所見：赤沈45 mm/1時間、赤血球350万、Hb 10.5 g/dl、Ht 31%、白血球15,800(好中性骨髄球3%、好中性後骨髄球2%、桿状核好中球12%、分葉核好中球10%、単球3%、リンパ球12%、異型細胞58%)、血小板0.8万、PT 82%(基準80~120)、APTT 34秒(基準対照32.2)、フィブリノゲン220 mg/dl(基準200~400)、FDP 5  $\mu\text{g/ml}$ (基準5以下)。血清生化学所見：AST 65単位(基準40以下)、ALT 32単位(基準35以下)、LDH 890単位(基準176~353)。CRP 13.5 mg/dl(基準0.3以下)。骨髓血塗抹May-Giemsa染色標本(別冊No. 20)を別に示す。

化学療法の前に行うべき治療はどれか。

- (1) 赤血球輸血
- (2) 血小板輸血
- (3) 広域抗菌薬の静脈内投与
- (4) 新鮮凍結血漿投与
- (5) ヘパリンの静脈内投与

a (1)、(2)    b (1)、(5)    c (2)、(3)    d (3)、(4)    e (4)、(5)

別冊  
No. 20 写真

34 67歳の男性。1か月前から感冒様症状が続くため来院した。2年前に定年退職するまでの健康状態は良好であった。現在、発熱、咽頭痛、咳および痰はなく、体重減少もない。軽い倦怠感を自覚することがある。身長163cm、体重73kg。体温36.6℃。脈拍72/分、整。血圧140/84mmHg。眼瞼結膜に貧血なく、眼球結膜の黄染を認めない。胸部に異常所見はない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。血液所見：赤沈15mm/1時間、赤血球460万、Hb13.5g/dl、Ht42%、白血球27,800(好中球15%、好酸球1%、単球4%、リンパ球80%)、血小板28万。血清生化学所見：総蛋白6.5g/dl、アルブミン4.5g/dl、AST35単位(基準40以下)、ALT30単位(基準35以下)、LDH330単位(基準176~353)。CRP0.5mg/dl(基準0.3以下)。リンパ球サブセット：B細胞85%(基準7~17)、T細胞10%(基準55~75)。

この患者を無治療で観察したとき、1年までの経過で最も可能性が高いのはどれか。

- a 安定経過
- b 白血球の著増
- c 巨脾の出現
- d 急性転化
- e ニューモシスチス・カリニ肺炎の併発

35 18歳の男子。抜歯後の出血が続くため来院した。乳児期からときどき鼻出血を繰り返している。10歳ころ下血のために輸血を受けたことがある。母親に出血傾向がある。皮膚は蒼白であるが、黄染と紫斑とは認めない。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。便潜血反応1+。血液所見：赤血球380万、Hb9.6g/dl、Ht34%、網赤血球15%、白血球5,200、血小板23万。

予想される検査所見はどれか。

- (1) 出血時間延長
  - (2) 血餅退縮不良
  - (3) 巨大血小板出現
  - (4) プロトロンビン時間延長
  - (5) 活性化部分トロンボプラスチン時間延長
- a (1)、(2)    b (1)、(5)    c (2)、(3)    d (3)、(4)    e (4)、(5)

36 12歳の男児。学校の腎臓病検診で血尿を指摘され来院した。自覚症状はなく、身体所見も異常はない。血圧106/64mmHg。尿所見：蛋白(-)、糖(-)、沈渣に赤血球10~15/1視野、白血球2~3/1視野、円柱なし。血液所見：赤沈6mm/1時間、赤血球420万、Hb14g/dl。血清生化学所見：総蛋白7.2g/dl、アルブミン4.9g/dl、尿素窒素8mg/dl、クレアチニン0.8mg/dl、総コレステロール170mg/dl。血清補体価正常。

今後の管理として適切なものはどれか。

- a 普通の生活をさせる。
- b 軽い運動だけさせる。
- c 教室内学習だけさせる。
- d 家庭で安静を守らせる。
- e 入院させて加療する。

37 70歳の女性。全身倦怠感を主訴として来院した。3年前から腰痛と膝関節痛のため非ステロイド性抗炎症薬を服用している。2か月前から全身倦怠感と食欲不振とが出現し、徐々に増悪している。尿所見：尿量2,200 ml/日、蛋白定性(±)、蛋白定量1.5 g/日。血清生化学所見：総蛋白6.5 g/dl、アルブミン4.0 g/dl、尿素窒素28 mg/dl、クレアチニン1.7 mg/dl、Na 138 mEq/l、K 4.5 mEq/l、Cl 115 mEq/l、Ca 14.0 mg/dl。

診断に有用な検査はどれか。

- (1) 尿蛋白の電気泳動
- (2) Fishberg 試験
- (3) 血中活性型ビタミンDの測定
- (4) 骨髄穿刺
- (5) 腎生検

- a (1)、(2)、(3)
- b (1)、(2)、(5)
- c (1)、(4)、(5)
- d (2)、(3)、(4)
- e (3)、(4)、(5)

38 58歳の男性。動悸と息切れとを主訴に近医から紹介されて入院した。43歳時の定期健康診断で尿糖を指摘され、その後も度々専門医を受診するよう勧められていたが、自覚症状がなく放置していた。1週前の忘年会後から浮腫が増強し、呼吸も苦しくなってきた。身長167 cm、体重76 kg。脈拍92/分、整。血圧176/112 mmHg。尿所見：蛋白3+、糖3+、ケトン体(-)、潜血(-)。Ht 21%。血清生化学所見：血糖350 mg/dl、HbA<sub>1c</sub> 8.8% (基準4.3~5.8)、アルブミン2.3 g/dl、尿素窒素98 mg/dl、クレアチニン6.5 mg/dl、Na 136 mEq/l、K 7.0 mEq/l、Cl 106 mEq/l。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.26、PaO<sub>2</sub> 80 Torr、PaCO<sub>2</sub> 28 Torr、HCO<sub>3</sub><sup>-</sup> 12 mEq/l。胸部エックス線写真で両側に胸水の貯留を認める。

まず行うべき処置はどれか。

- a 経口糖尿病薬の開始
- b 重炭酸ナトリウムの静注
- c 洗浄赤血球の輸血
- d 血漿製剤の輸液
- e 血液透析

39 2歳の女兒。繰り返す尿路感染の精査のため来院した。1歳5か月ころから時々高熱をきたし、近医で尿路感染症の診断で保存的治療を続けている。排尿時膀胱尿道造影写真(別冊No. 21)を別に示す。

原因として考えられるのはどれか。

- a 尿路結石
- b 膀胱憩室
- c Wilms 腫瘍
- d 重複腎盂尿管
- e 膀胱尿管逆流

別冊  
No. 21 写真

40 22歳の女性。未婚、未妊。3か月前から軽度の下腹部痛があり来院した。月経は28日型、整。左下腹部に軟らかい腫瘤を触れる。双合診で右付属器は鶏卵大、左付属器は手拳大に腫大している。CA125 33 U/ml(基準35以下)、CA19-9 45 U/ml(基準37以下)。骨盤部MRIのT<sub>1</sub>強調像(別冊No. 22A)、T<sub>2</sub>強調像(別冊No. 22B)および脂肪抑制T<sub>1</sub>強調像(別冊No. 22C)を別に示す。

この患者の治療で適切なのはどれか。

- a GnRH アゴニスト投与
- b 腫瘍穿刺
- c 両側卵巢楔状切除術
- d 両側卵巢囊腫切除術
- e 両側付属器摘出術

別冊  
No. 22 写真A、B、C

41 34歳の2回経産婦。不正出血を訴えて来院した。分娩2か月後から月経は回復していたが、5か月目から少量の不正出血を認めた。内診では子宮は正常よりやや大きく、付属器に異常はなかった。経腔超音波検査で子宮体部に子宮筋腫様の腫瘤がみられ、子宮体部細胞診では異常細胞を認めた。ヒステロスコピ下の組織生検を行い、そのH-E染色標本(別冊No. 23A)を別に示す。尿中hCGは120 IU/l、血清hCG-βは5 ng/mlであった。本人および家族と相談の結果、単純子宮全摘術を行った。摘出子宮標本の写真(別冊No. 23B)を別に示す。

正しいのはどれか。

- a 子宮内膜異型増殖症
- b 子宮内膜癌
- c 子宮体部肉腫
- d 絨毛癌
- e 存続絨毛症

別冊  
No. 23 写真A、B

42 25歳の女性。性交不能を訴えて来院した。初経14歳、以来、月経は整で月経障害はない。視診で膣入口部から膣腔を左右に分ける膣縦中隔を認めた。骨盤部MRIのT<sub>2</sub>強調像(別冊No. 24A)と縦中隔切除後1か月の膣鏡診の写真(別冊No. 24B)とを別に示す。

正しいのはどれか。

- a 痕跡子宮
- b 単角子宮
- c 単頸双角子宮
- d 弓状子宮
- e 重複子宮

別 冊  
No. 24 写真A、B

43 65歳の男性。右上下肢に力が入らないことを主訴に来院した。40歳ころから高血圧と肥満とがある。2年前から突然左眼がみえなくなり数分後に視力が回復する発作が3回あった。今日の午後1時ころ炎天下で農作業中に突然右上下肢の脱力をきたした。意識は清明。身長165cm、体重76kg。脈拍96/分、整。血圧186/98mmHg。顔面を含む右片麻痺と右半身の表在感覚低下とを認める。

最も考えられる障害部位はどれか。

- a 大動脈弓
- b 脳底動脈
- c 左椎骨動脈
- d 左内頸動脈
- e 左外頸動脈

44 76歳の男性。発熱と食欲不振とを主訴に搬入された。60歳ころから手足のふるえ、歩みにくさ、大きな声が出ない及び動作が遅くなるなどの症状が出現し、徐々に進行してきたため外出するのがおっくうになった。歩行障害は当初、薬物治療によって軽快していたが、近年薬効は乏しくなった。体温39.8℃。脈拍120/分、整。胸部にcoarse crackles(水泡音)を聴取した。意識は清明であったが、頸部と四肢との筋固縮、四肢の安静時振戦および無動を認め、歩行はできなかった。誤嚥性肺炎と敗血症とのために第12病日に死亡した。剖検時の脳組織H-E染色標本(別冊No. 25)を別に示す。

この患者の基礎疾患に用いられる薬物はどれか。

- (1) レドバ薬
- (2) アマンタジン
- (3) フェニトイン
- (4) クロルプロマジン
- (5) コリンエステラーゼ阻害薬

a (1)、(2)    b (1)、(5)    c (2)、(3)    d (3)、(4)    e (4)、(5)

別 冊  
No. 25 写 真

45 20歳の女性。コンピュータ入力作業中に右上肢のしびれとだるさを自覚するようになり来院した。なで肩で右上肢下垂時に症状が強くなる。右前斜角筋部に強い圧痛がある。深部腱反射は正常で、病的反射はない。感覚障害と筋力低下とはみられない。

考えられる疾患はどれか。

- a 肩鎖関節炎
- b 肩関節周囲炎
- c 関節リウマチ
- d 胸郭出口症候群
- e 頸椎椎間板ヘルニア

46 67歳の女性。歩行障害を主訴に来院した。2年前から右手指のしびれ感を自覚していた。右上腕の筋力低下、感覚鈍麻および深部腱反射低下がある。両下肢に筋力低下、深部腱反射亢進およびBabinski徴候を認める。

最も考えられるのはどれか。

- a 脳幹脳炎
- b 脊髄小脳変性症
- c 頸椎症性脊髄症
- d 筋萎縮性側索硬化症
- e 亜急性性連合性脊髄変性症

47 60歳の女性。右膝関節の運動痛と屈曲制限とを主訴に来院した。1か月前から動作開始時に生じる膝関節痛がある。関節穿刺によって黄色透明で粘稠度の低い関節液を30 ml採取した。血清CRP 0.3 mg/dl (基準0.3以下)、リウマトイド因子陰性。

対応として適切でないのはどれか。

- a 階段昇降訓練
- b 大腿四頭筋筋力強化訓練
- c 膝装具の処方
- d 楔状足底板装具の処方
- e インドメタシン投与

48 51歳の男性。3日前から39℃前後の発熱と激しい頭痛とがあり、家族に伴われて来院した。意識は混濁し、項部硬直を認めた。体温39.7℃。呼吸数18/分。脈拍92/分、整。血圧152/70 mmHg。血液所見：赤沈70 mm/1時間、白血球14,000(好中球68%、単球6%、リンパ球26%)、血小板41万。血糖102 mg/dl。CRP 10.5 mg/dl (基準0.3以下)。脳脊髄液所見：初圧190 mmH<sub>2</sub>O (基準70~170)、黄色混濁、細胞数15,000/mm<sup>3</sup>(基準0~2)(多核球85%)、蛋白77.4 mg/dl (基準15~45)、糖15 mg/dl (基準50~75)。

最も考えられるのはどれか。

- a ウイルス性髄膜炎
- b 細菌性髄膜炎
- c 結核性髄膜炎
- d 真菌性髄膜炎
- e 癌性髄膜炎

49 78歳の女性。意識障害のため救急車で搬入された。感冒罹患を契機に5日前から食欲が低下し、ほとんど食事が摂れなかった。昨夕近医でブドウ糖の大量輸液を受けたところ、明け方、意識低下に家族が気付いた。最近、視野が狭くなり、新聞が読みづらいと訴えていたという。脈拍64/分、整。血圧102/64 mmHg。浮腫も脱水もない。血清生化学所見：空腹時血糖117 mg/dl、総蛋白6.5 g/dl、アルブミン4.1 g/dl、尿素窒素6 mg/dl、クレアチニン0.4 mg/dl、尿酸2.2 mg/dl、Na 105 mEq/l、K 4.3 mEq/l。血清浸透圧206 mOsm/l (基準275~288)、尿浸透圧366 mOsm/l (基準50~1,300)。頭部CTで下垂体部に径25 mmの腫瘤を認める。

最も考えられるのはどれか。

- a うっ血性心不全
- b 肝硬変
- c 慢性腎不全
- d 副甲状腺機能低下症
- e 続発性副腎機能低下症

50 24歳の女性。動悸、発汗過多および体重減少のため来院した。脈拍124/分、整。血圧120/70 mmHg。発熱はなく、自発痛や圧痛を伴わないびまん性甲状腺腫と手指振戦とを認める。赤沈10 mm/1時間。血清生化学所見：TSH 0.01  $\mu$ U/ml 未満(基準0.2~4.0)、free T<sub>4</sub> 2.6 ng/dl(基準0.8~2.2)。免疫学所見：CRP陰性、抗サイログロブリン抗体陽性、抗ミクロゾーム抗体陽性、TSH受容体抗体陰性。超音波検査所見で甲状腺のびまん性腫大を認める。甲状腺<sup>123</sup>I摂取率(24時間値)は4.2%(基準10~40)である。

診断はどれか。

- a 急性甲状腺炎
- b 亜急性甲状腺炎
- c 無痛性甲状腺炎
- d Basedow病
- e Plummer病

51 10歳の女児。肥満を主訴に来院した。9歳のころから身長は伸びないのに体重増加が著しい。学業成績は普通である。身長130 cm、体重63 kg。血圧130/84 mmHg。下腹部・大腿部の写真(別冊No. 26)を別に示す。

診断に最も有用な検査はどれか。

- a 経口ブドウ糖負荷試験
- b デキサメサゾン抑制試験
- c LH-RH負荷試験
- d PTH負荷試験
- e TRH負荷試験

別冊  
No. 26 写真

52 32歳の男性。視力低下を主訴に来院した。18歳、大学入学時の健康診断で尿糖陽性を指摘されたが自覚症状がないため放置した。最近、視力低下が出現したため眼科を受診し、増殖前糖尿病網膜症と診断され内科受診も勧められた。父に糖尿病がある。身長168 cm、体重82 kg。脈拍84/分、整。血圧186/94 mmHg。尿所見：蛋白3+、糖2+。血清生化学所見：空腹時血糖168 mg/dl、HbA<sub>1c</sub> 8.2%(基準4.3~5.8)、総蛋白6.8 g/dl、尿素窒素42 mg/dl、クレアチニン1.6 mg/dl。

この患者について正しいのはどれか。

- (1) 若年発症の2型糖尿病と考えられる。
- (2) 早期腎症期の糖尿病性腎症である。
- (3) 直ちに運動療法を実行させる。
- (4) 強化インスリン療法を開始する。
- (5) レーザー光凝固療法の適応がある。

a (1)、(2)    b (1)、(5)    c (2)、(3)    d (3)、(4)    e (4)、(5)

53 42歳の男性。くしゃみ、鼻汁および流涙を主訴に来院した。5年前から春になると同症状を繰り返している。眼球結膜に軽度の発赤がみられる。前鼻鏡検査では両側下鼻甲介の腫脹が高度で、鼻汁が充満している。咽頭と扁桃とに異常はない。血液所見：赤血球450万、Hb 14.0 g/dl、白血球5,600。RASTで花粉に対するIgE抗体が高値である。

鼻汁中に特徴的に増加するのはどれか。

- a 好中球
- b 好酸球
- c T細胞
- d B細胞
- e マクロファージ



54 67歳の女性。発熱と四肢の痛みとを主訴に来院した。1か月前、早朝に両側の肩から上腕にかけてこわばりと疼痛とが出現し、次第に増強するとともに腰から大腿にも痛みが拡大し、日常生活動作が困難となってきた。1週間前から発熱を伴うようになった。視力の異常は自覚していない。体温38.2℃。脈拍72/分、整。血圧142/84 mmHg。胸・腹部に異常所見を認めない。四肢腱反射に異常はなく感覚障害を認めない。尿所見：蛋白(-)、糖(-)、潜血(-)。血液所見：赤沈95 mm/1時間、赤血球336万、Hb 11.5 g/dl、Ht 31%、白血球8,700、血小板35万。血清生化学所見：総蛋白7.6 g/dl、アルブミン4.1 g/dl、尿素窒素20 mg/dl、AST 35単位(基準40以下)、LDH 330単位(基準176~353)、CK 35単位(基準10~40)。免疫学所見：CRP 12 mg/dl(基準0.3以下)、リウマトイド因子陰性、抗核抗体陰性。

最も考えられるのはどれか。

- a 全身性エリテマトーデス
- b 多発筋炎
- c 結節性多発動脈炎
- d リウマチ性多発筋痛症
- e 関節リウマチ

55 42歳の男性。発熱、乾性咳嗽および呼吸困難を主訴に来院した。仕事でしばしば海外に出張している。6か月前から発熱、下痢を繰り返し、3か月で6kgの体重減少を認めた。体温38.6℃。脈拍80/分、整。心雑音はないが、肺野にfine crackles(捻髪音)を聴取する。腹部に異常所見はない。神経学的に異常所見はない。血液所見：赤沈65 mm/1時間、赤血球386万、Hb 13.0 g/dl、白血球4,200(好中球78%、単球2%、リンパ球20%)、血小板12万。LDH 470単位(基準176~353)。CD4陽性細胞125/mm<sup>3</sup>(基準500以上)。胸部エックス線写真で両側肺野に間質性陰影を認める。

肺病変について最も可能性の高いのはどれか。

- a 細菌性肺炎
- b 過敏性肺臓炎
- c ニューモシスチス・カリニ肺炎
- d 真菌性肺炎
- e 肺結核

56 29歳の女性。発熱、咳および痰を主訴に来院した。1週前から発熱と咳とが出現し、市販のかぜ薬を服用していたが、昨日から痰が出現するようになった。体温38.5℃。呼吸数24/分。脈拍96/分、整。血圧100/60 mmHg。右下肺野で coarse crackles (水泡音)を聴取する。血液所見：白血球5,600。免疫学所見：CRP 3.8 mg/dl (基準0.3以下)、寒冷凝集反応512倍(基準128以下)。胸部エックス線写真(別冊No. 27A、B)を別に示す。

最も適切な治療薬はどれか。

- a マクロライド系抗菌薬
- b セフェム系抗菌薬
- c 非ステロイド性抗炎症薬
- d リン酸コデイン
- e アセトアミノフェン

別 冊  
No. 27 写真A、B

57 6歳の男児。口を開きにくいことを主訴に来院した。1週前に公園で素足で遊んでいて右足踵をガラス片で切ったが、間もなく止血したので放置していた。昨日から食物がかみにくくなった。意識は清明。体温37.5℃。開口障害、頸部の筋硬直および四肢の緊張感を認める。対光反射は正常である。脳脊髄液所見は正常である。

この疾患で正しいのはどれか。

- (1) 病原菌は好気性菌である。
- (2) 症状は菌体内毒素による。
- (3) 受傷後早期に発症するものほど重篤である。
- (4) 受傷部の早期処置が重要である。
- (5) 副腎皮質ステロイド薬が有用である。

- a (1)、(2)    b (1)、(5)    c (2)、(3)    d (3)、(4)    e (4)、(5)

58 38歳の男性。小学校教師。微熱を主訴に来院した。生来健康であったが、1年前から疲れやすく、6か月前から時々咳に気付くようになった。1週前から熱があるような気がしていたが、勤務先では体育祭の準備があり放置していた。体育祭の終わった翌日受診したところ、胸部エックス線写真で左上肺野に空洞を伴う浸潤影を認めた。GaffkyⅢ号であった。

この男性の勤務先でまず行うべきことはどれか。

- a 学校内の消毒
- b 担任学級の閉鎖
- c 児童全員の喀痰検査
- d 接触した児童のツベルクリン反応検査
- e BCG未接種者への接種

59 23歳の男性。前日からの米のとぎ汁様下痢を主訴に来院した。3日前に東南アジア観光旅行から帰国した。意識は清明。身長168 cm、体重56 kg。体温36.4℃。脈拍80/分、整。血圧110/60 mmHg。腹部に圧痛はなく、肝・脾を触知しない。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤血球550万、Hb 19.0 g/dl、Ht 50%、白血球9,000。血清生化学所見：総蛋白6.2 g/dl、アルブミン3.3 g/dl、AST 20単位(基準40以下)、ALT 18単位(基準35以下)、Na 135 mEq/l、K 3.2 mEq/l。

適切でないのはどれか。

- a 糞便培養
- b 輸液
- c 抗菌薬投与
- d 強制入院
- e 保健所への届出

60 48歳の女性。夫に付き添われて救急車で来院した。激しい夫婦げんかの末「死んでやる。」と言って納屋に行き、そこにあったパラコートを飲んだ。夫の話によると飲んだのは約15分前で、およそ40 mlの量であった。興奮しているが意識は清明である。呼吸数24/分。脈拍104/分、整。血圧138/88 mmHg。

まず行うのはどれか。

- a 酸素吸入
- b 胃洗浄
- c エピネフリン皮下注
- d 副腎皮質ステロイド薬静注
- e マニトール静注

◎ 下記の欄に受験番号および氏名を記入すること。

受 験 番 号	氏 名 (楷 書 で 書 く こ と)